

当社のIFRS導入実績

当社では2009年から2010年にかけて顧客企業のIFRS導入プロジェクトに対して支援業務を実施しています。

国内での強制適用が求められていない段階での非上場企業に対する適用ですが、海外での資金調達を視野に入れたIFRS導入プロジェクトでした。

このプロジェクトにおいて、導入のステップ、必要な社内体制、システム化の検討、監査法人の対応などについて一定のノウハウを吸収しました。

ここではその概要をご紹介しますが、今後も他社事例を積み上げていきますので、それらの詳細についてはお問い合わせ下さい。

1. IFRS導入の事例概要
2. プロジェクト体制事例
3. スケジュール事例
4. 社内リスクマネジメント
5. 文書化及びシステム化

1. IFRS導入の事例概要

当社の関与した導入プロジェクトは非上場企業が実施したものであり、その導入に対する社内支援業務でした。IFRS導入に関しては、今後は上場会社が主に適用を求められるものですが、当社実績事例では大手監査法人による監査が前提となっているなど、上場会社の状況と類似しています。

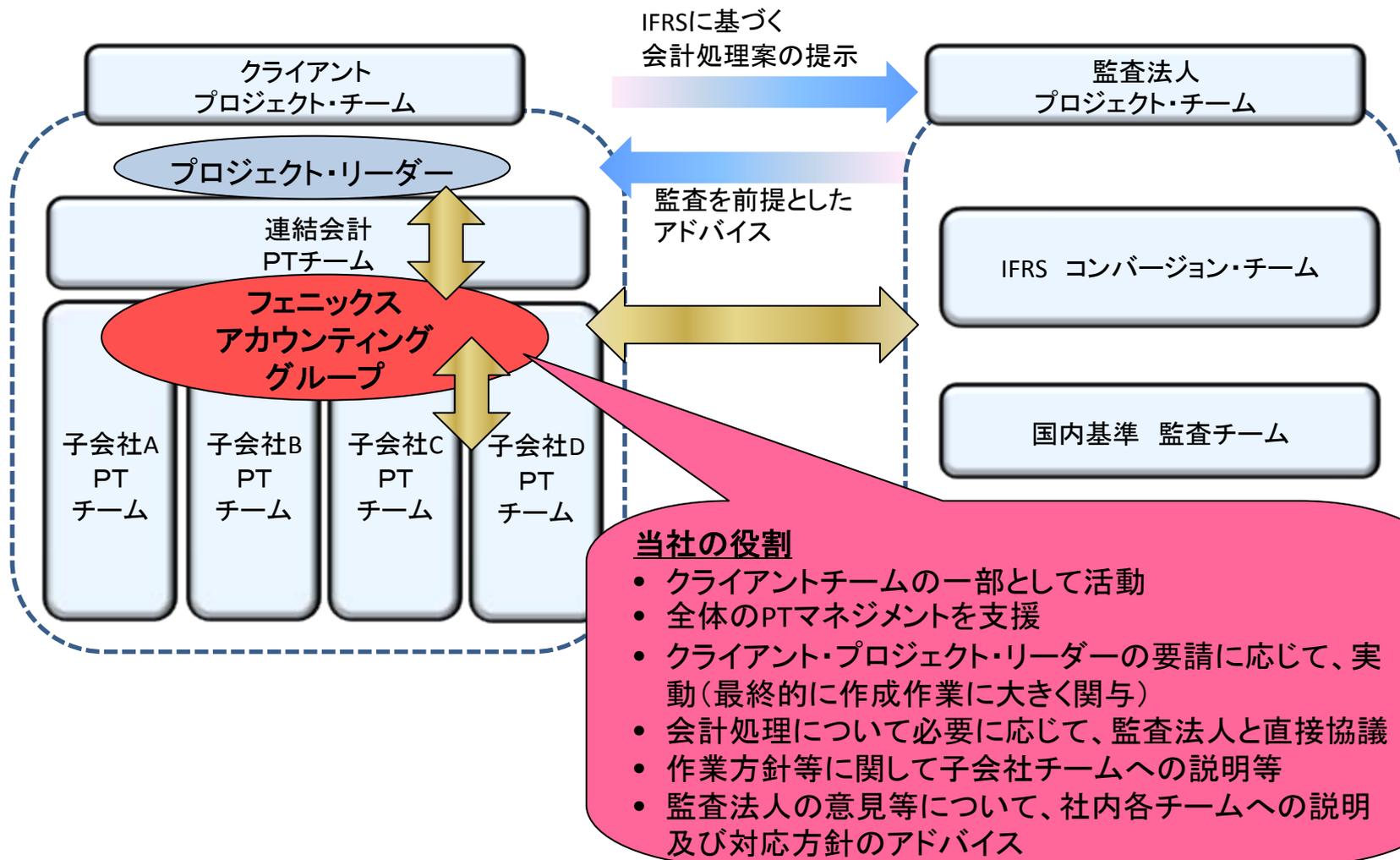
- 事業内容: 小売業
- 売上規模: 約1,300億円 (IFRSベース)
- 総資産: 約1,500億円 (IFRSベース)
- 対象年度: 2008年度及び2009年度
- 子会社数: 9社
- スケジュール: 2009年8月から2010年3月及び現在まで
2010年6月監査報告受領(当初予定)
- 監査法人: 有限責任監査法人トーマツ
- 目的: 海外での資金調達を視野に入れた導入

- 
- ① 監査法人による監査を前提
 - ② 非常にタイトなスケジュール



2. プロジェクト体制事例

導入事例における、顧客企業、監査法人、当社で以下のような体制によりプロジェクトを推進しました。



3. スケジュール事例

IFRS財務諸表作成プロジェクトタイムスケジュール			2009年				2010年			
大項目	中項目	小項目	1～3月	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	4～6月	7～9月	10～12月
I 全般	I PJチーム編成 II 会社全体の概要の把握 III 分担の決定				→					
				→	→					
				→	→	→				
II 分析と対応策の検討	I 会社別の準備	1 勉強会の実施			→					
		2 会計基準差異の認識			→					
	II 会計基準差異の抽出	1 会計基準差異の網羅的検討				→				
		2 例) 決算期変更、固定資産、有給休暇引当金…など				→				
		3 論点ごとに、分担の再決定				→				
		4 論点ごとに、差異を詳細に抽出				→				
5 抽出結果に基づく仕訳に必要な情報の準備					→					
III 各社別IFRSベースの財務諸表の作成	I 修正仕訳の作成	1 仕訳の作成				→				
		2 現場、経理部、経営企画室、経営者による検討				→				
	II 修正仕訳の反映	個別の財務諸表への反映(精算表)				→				
	III IFRSベースの様式に合わせた財務諸表の組換	IFRSベースの勘定科目体系に合わせて日本基準の勘定科目を組み替える				→				
	IV IFRSベース個別財務諸表の作成	精算表に組換結果も含めて反映することにより作成				→				
V 個別財務諸表の検討	経理部、経営企画室、経営者による検討				→					
IV IFRSベースの連結財務諸表の作成	I 基準の確認	1 連結範囲				→				
		2 非支配持分など、会計処理方法の確認				→				
	II 連結仕訳の作成	1 日本基準の連結仕訳の把握				→				
		2 必要な連結仕訳の修正(のれんの修正など)				→				
		3 その他、日本の連結仕訳の差異について修正(未実現利益の税効果など)				→				
	III IFRSベース連結財務諸表の作成	精算表に連結仕訳を反映				→				
V IFRSベースの財務諸表の分析	I IFRSベース連結財務諸表の検討	1 結果とあるべき姿とのギャップを認識				→				
		2 ギャップの対応方針の検討				→				
		3 スケジュールの検討				→				
	II 分析結果の反映	1 社内で必要な調整をする。								→
		2 社外の関係者との必要な調整をする。								→
		3 結果を見越して、計画を見直す。								→

上記はIFRS導入事例における特殊なスケジュールであり、一般的には3年の準備期間が必要とされています。

4. 社内リスクマネジメント

IFRS導入プロジェクトを真の意味で成功させるためには企業価値リスク・マネジメント、監査リスク・マネジメント及び会計プロセスリスク・マネジメントの3つのリスクマネジメントを並行して実施する必要があります。

それぞれのリスクについて、プロジェクトの導入時に経営陣及びプロジェクト・チームによって正しく理解されることが、成功の鍵となります。

対応リスク	リスクの概要	マネジメント手法(例)
企業価値リスク	個別の取引及び事象が企業価値に影響を与えるリスク ー日本基準で把握していたリスクも、IFRSを前提とするリスクの方向及び大きさが変わる可能性があります。	<ul style="list-style-type: none"> ❑ 中期経営計画及び予算作成過程にIFRSの考え方を導入 ❑ 新規取引時の会社業績に与える影響の検討プロセスにIFRSの考え方を導入(収益の計上基準など)
監査リスク	IFRSへの準拠が適切に実施できず、監査意見が入手できないリスク ーIFRSアドプションにおいて最も気にされているこのリスクは、強制適用までに対処すればよいリスクです。	<ul style="list-style-type: none"> ❑ 監査直前まで監査人の意見が明確にならない領域について把握 ❑ プリンシパル・ベースの基準のため、社内基準を設定し、監査人の了解を得る
会計プロセスリスク	IFRSベースの会計処理が社内で継続的に実施できない、若しくはコストが過剰になるリスク ー継続適用のためには、社内の決算作業として一定程度の労力でIFRSの要件を満たすように業務プロセスを構築する必要があります。	<ul style="list-style-type: none"> ❑ 社内基準を文書化 ❑ 効率的な場合にはシステム化を推進 ❑ 大量の取引に対しての判断は内部統制への組込を実施

5. 文書化及びシステム化

会計基準のコンバージョンのプロジェクトには、会計処理に関する考え方やその判断の文書化、また特定の会計領域に関するシステム化が必須の実施項目になります。

また、これらの文書化及びシステム化は、時間をかけて実施していく必要があります。

そのためには次のようにIFRSの導入プロジェクトを推進する必要があります。

- － 早めに検討を開始。
- － 社内でその目的等を理解。
- － 会社のほぼ全ての部署が関与。
- － 特別準備チームを設置。
- － 経営陣が主導して導入を実施

